ヤングアダルトケアラーと仕事

長谷川拓人（成蹊大学大学院）

ヤングアダルトケアラー（Young Adult Carer）とは、病気や障害のある家族を日常的に世話する 18 歳～25 歳の若者である（Becker and Becker 2008）。ヤングアダルトケアラーは、「成人期への移行」の時期にいる若者でありながら、介護や看護といった「身辺的なケア」、話を聞いたり寄り添ったりする「情緒的なケア」、さらには家事や病院への付き添いなどを日常的にこなす。その一方では、身の回りの世話や経済的な援助、さらには相談したり話を聞いてもらったりするといった精神的なサポートを、親などの家族から充分に受けることができない。一般の若者と異なって、家族から頼られる形で自分の人生を形作っていかなければならないというのが、ヤングアダルトケアラーの特徴である。

ヤングアダルトケアラーへの調査と支援体制の整備を世界に先駆けて進めてきたイギリスでは、ヤングアダルトケアラーがキャリア形成の際に困難に直面することが指摘されてきた（Becker and Becker 2008； Sempik and Becker 2014）。そこでは、ケア役割やケア責任、レスパイト利用のできない状況などによって、仕事を探す段階で就職先の選択肢を狭めてしまったり、仕事に就いても早期に失業したり、その後の再就職が難しくなってしまったりするヤングアダルトケアラーの経験が描かれている。また、日本でも、若者ケアラーを扱った新聞記事の分析において、就職活動ができなかった人や就職 1 年目で退職した人などを事例に、キャリアの中断や不形成を経験するヤングアダルトケアラーについて論じられている（松崎 2014）。

本報告では、18 歳～25 歳の時期に家族のケアを担いながら就職した人の語りに焦点を当て、ヤングアダルトケアラーにとって仕事を持つことの意味を分析する。インタビュー調査は、2021 年 4 月～2024 年 4 月にかけて筆者が実施した。調査データの扱いについては、匿名化した上で、学術目的でデータを使用することの許可を受けている。ヤングアダルトケアラーの概念には、1）18 歳未満の子どものケアラーを指す「ヤングケアラー」が大人になったケース、2）18 歳を超えてから家族のケアを始めた場合の二種類が含まれているが、本報告では、子どもの頃から蓄積された不利さが「成人期への移行」の準備や選択の時期に現れやすい状況を鑑み、特に前者に絞って分析を進めた。

分析からは、職場という実家とは異なる空間の確保、収入と社会的立場の獲得などが、ヤングアダルトケアラーに前向きな意味を持つことが明らかになった。就職したヤングアダルトケアラーの生活は、キャリアを形成する「新人」であるがゆえに、仕事中心になる。実家暮らしの場合は、仕事終わりや休日に家族に向き合い、一人暮らしのケースでは、定期的な帰省や経済的なサポートという形でケアに関わるようになっていた。しかし、そうした中でも、ケアを要する家族にトラブルが起きて対応が求められるときには「突発的な遅刻や早退や休み」を経験し、家族の状況によっては、途中で仕事を辞めるかどうかの選択に迫られることが分かった。

一方、離職を通して、そうした環境や収入や立場を失うと、ヤングアダルトケアラーの生活軸はケアに置かれるようになるが、そうしたケアに専念する自身の状況は、周囲の人に説明しにくいことが明らかになった。

参考文献

Becker, Fiona and Saul Becker, 2008, *Young Adult Carers in the UK: Experi-ences, Needs and Services for Carers Aged 16-24*, The Princess Royal Trust for Carers, London.

松崎実穂, 2014, 「メディアにみる「家族を介護する若者」――日本における社会問題化を考える」『Gender and Sexuality』10, 187-201.

Sempik, Joe and Saul Becker, 2014, *Young Adult Carers and Employment* , Carers Trust, London.

キーワード：ヤングアダルトケアラー、成人期への移行、キャリア